

解方藥

10



二 況

二條殿

信濃公様御記

花中鳥歌

芭蕉柳若靈神也十月廿二日百五十四回を忌に至りて道の

依若祖換別と思ふといふ

花中大明神と授弁に 仰より將又先月廿六日於 清殿

中開眼之 仰能借歩連歌御供行と居在り

二條殿

白州と帯もきくやまの巻

春さくら大津くま 花 鳥歌

け事古の地子養ふくはらへ何の心もいへぬ  
あはれちかきまゝにまゐりてあはれにまゐりて

同九月

のり  
花分今既

なり

願事をもてまゐりておろそかさを  
井底空方そらぬをもとむるあり  
とかやゆして産地と境をまを  
まみあはれに教ふるおおめを  
そまをゆるしてまゐりてまゐりて  
物ふる過うにゆきし仲乃秋中の一  
う。祝ひぬのるま十回乃まゐりて

りきんとさるう塚を撫ら清を地由  
小倉うさちのきときをを乃能あるを  
行ふ或ハ略海をさるえ或ハもらるを  
わらちうてやうをうわやうはとけま  
おきおかじとせぬのき武いとまてい  
なるらちとせり乃き向まハはらちの少  
はるらしとまらとらとらとらとらと  
とらとらとらとらとらとらとらとらと

あてはらうの法あるの結志とむら  
半らうとらふくはそ乃 祝杯とそ先  
むとけりそらとらとらとらとらとらと  
ハはらちとらとらとらとらとらとらと  
とらとらとらとらとらとらとらとらと  
かへらとらとらとらとらとらとらとらと

梅のうさち





いむのむし

きんぎょ

ま

ま

庵



祖翁真迹之分

以善虫けりるを

きふくの事

古池や桂

先きのむ

山里ハ万葉

け程をさる

一里ハいふるは

婦さきと山桂

涼しきやまの聖天川

明新千二十七款

阿海や佐渡

孟二泥菜は

一軸

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

松茸ふなけよ  
 古々や緋の緒  
 赤くくと日ハ  
 二日月もぬき  
 雪もや小糖の  
 やうて志ぬ系しき  
 名月秋五  
 茶葉茶葉の茶  
 色のきは唇にし  
 門人名前録  
 俳諧思書  
 互古切屏風  
 くらくた  
 一巻 一巻 一巻 一巻 一巻 一巻 一巻 一巻 一巻 一巻

水鏡集

東麓西麓之文  
末期之文

西兄弟

嵯峨日記

祖翁古郷塚之圖

碑面

芭蕉桃青法師

云峰庵嵐雪之筆

一巻

一巻





天保壬寅八月十二日於吉口塚

芭蕉翁百五十遠忌追福興行

眼起能語之連歎

このすゝけ 其喜線やうきよ子の尾

祖翁

今も猶もむ池水の月 二石

帘のすし眼 二こうろき方晴る 梅室

人よりそをやうきよのある市 遠水

ひまくと扱ひくわ休るゝ 一志

自中より梅残きく長川口 鷺秋

何處へやら母のいそれり松の風

礪山

柴木の原も枯るありき

求古

よいつを奥の山家へ賞るべし

杜鰲

き針酒をなす銭をむ

金波

まことの分よるる名を帯

賀圃

柴を町ても又多る傘

魯月

又子の衣店兼つる格子さし

希声

故きりなむきくきし燗

淡菴

つな書くそく経の志とらなる

芦岸

まきれらむ吸あゆ戸栢

孝子

上ノ一

振接もあつふ巾着あきの月

梅價

圓くくくくくくくくくくく

木容

将衣の袖もちきれる形分ぬく

挑溪

又一二刺破えく葉ふき

楓不

とれども又花も地をさふ風とる

其容

斤たつさみよ架和合書る

子石

まのこくはかおぬれ袖も人像

馬文

やいそくくくくかいらさる爺

士遊

昔やい飛ふ襟の割本を積ちる

楓下

は速引ははす接をむつ

一東

お暇に家のやうな 武者掬 凸凹

から入極なれとせうつくる 九富

先任の時代と合致ハ代きくわ 若阜

嘔のおもふなりとてふき 杏菊

かくされと文箱せと者清後口 寿堂

と多れく切をうつす水針 政年

ふれとよ菜の母とつうぬなあり 備美

遊ハのほれいおらの庭倉 郎水

くのせとそふとふとまきとやむ 悠年

やくそく多き瓜のころもね 孫雪

入のうらふいやとるきとて入と 月石

塔の九輪のうらえゆらまると 露洲

牛若れく牛越ユ合と通まハハ 秋持

被の人よらふと所けけ 風光

この流乃とまきとけりともりき 毛櫛

骨半時となりハ年の尾 里柏

腰板の木地のむとある番をの備 梅亭

うちさうとめじる柄板のみ 春領

涼くさく月の木をぬれおをこきて 惟草

旋束のさくともきとぬそ直り 双危

先標は足のみかれを扇をふる

鳳尾

ニそ猿戸のかうくうな象

如風

早く来る招引の花枝くらみ

梅通

半くやうさるくく嘘うかす

子守

此春もあつとくは春ふとく古用

春坡

神くくくきふた刀磨き也

正木

小軍くあつとく人丈の拂夜り

瓢石

昔火く真を投ぬく焼く

玉脂

積雪く窓からあを扱いきさう

岳風

灰の宿てなまてぬくく健しさ

九起

田

湖まよと流れとくらぬ古藝者

月披

ちきれ草波波浪く夢く

芦洲

片岸のくふりあつとくおあらし

照布

勢のそそくかたりぬ路くらぬ

雲高

口をくあきいて日産の寄をくみ

風阿

急しくも浪くくく糸方

不二権

きくく月く小空き歩き梳

文章

一寸くも半くく稿のくふさ

乙勢

葦山へ庭くくちくくくくく

梅枝

ぬり杖はけハ影をえらく

永年

丁子風呂毎日入まると香も涼し

本轉うして一念をなす

たまに口音を依母の歌う

馬も通らぬ満願寺あら

話てこそきこむおとすを招の昔

月の雲のふけふとくさる日

色は又逢ふとやる群るなま

肥前の信と連るをやり

花やうなれとくさる急げ打

夢とくさるくさる人丸

上四

うへる厚けりし列をぬりかへ

二三日船の汲る下の瀬

まじりて晴ぬり粉哉きらけおや

ふさくと整つてきぬぬり

とふしても奉ふとくさるきぬぬり

枝弱なれと自注なる高

つきさるて祝のみき一すともい

か〜とくさるりの袂のなま

さら〜と砂のあふる瀬やま

を招よりきこふよる丁子の

鹿角

草良

鼻高

鳥乙

草丈

梅暇

空弘

少雄

林考

信玄

鉄富

余力

石鼎

我翁

いそほ

梅隣

橋治

園堂

竹山

双鷺

桑をとつて礼を舞ひ我は海子 杉賢

持ちたる筆は我は海子 辻の橋 与文

鳥より驚きさきとく追ひけり 石

疵瘡汁を送りせしむる 出

卵乳と月いそぎ成つれり 且多

露のなうれる庭に散る石 多轍

志らぬの隣りやうり勢路 玉振

からみ振ても鳩のつらき 松歩

笑ふ事ふとくとも姉は仕立き 草也

つらきとく通すは海の子持 梅井

上八

儉約の世ともやらぬ 葛根をり 清高

はくく日和り引拂ふあり 蕩只

号なき花枝ありの化城 赤白

と深なき道をふかきふなあり 拾五

配役

奠供

地福寺  
春日寺

寬靜  
仗應

祭文

持佛寺

梵甲

表白

万福寺

隆海

唱禮

院主

慈善

呗匿

藥師寺

吳朝

散花

藏之坊  
安樂院

惠田  
賢亮

前讚

毘沙門寺  
善福院

義亮  
仗淨

經頭

隅之坊

智專

後讚

神王寺  
密乘院

親頃  
惠光

廻向

大福寺

明鏡

右所定如件

維天保十三壬寅歲

八月十有一日

宗匠

副匠

執筆

捻香

座見

應容

梅室

虛白  
礪山

拾五

遠水

杜鰲  
杏芥

正木  
卧雪

董溪  
政年

津晃  
春眠  
橘治

一東

双鵝  
月石

千艸  
金波

梅隣  
若阜

芦岸  
五槁  
魯月

軸物掛リ

餐頭



補助

草子  
賀園  
希声

會頭

遠水  
求古  
鹭秋

たるりーやふふる記振の字は是 梅室  
 みのむしれき哉かふ来く泣りふ 青白  
 霜のぬやりの、望敷の丸くたる 一志  
 時子余々似る懐きくや秋の空 杜鰲  
 嗽しき初名きくや露草 礪山  
 空の鼻あふ 何喰く城きや 江戸鳳朗  
 菴の居る身し志くは秋の風 六板 八千房  
 中皇を傳へる身くはるつ時雨 三板 卓池  
 古の此名は玉やく 芭蕉う那 六板 鼎左  
 中乃きくしむる志くは古の塚、井左

翻ふしうり巾 雲んたわすまに 樵室  
 時魚もや年くふもる芭蕉の根 井邊  
 木魚もしくももるを 碓氷 素屋  
 りくもる 塚のしるも 秋なるも 天来  
 大空とむらりもりけを 臥成 其瓊  
 秋のくれ花よよとまてよー 一七 せふ  
 露もや時子の縁と上るも 楓溪  
 萩もきくもりのきくも 傳くも 梅暎  
 道(一) 折葉もる葉 秋も白 花 九起  
 このむのきよもらりもるも 遠の人 一七 林曹

花のしやうにたぐも 秋のきく 梅暎  
 あまぬやおもひも けふも 江戸 惟尊  
 けきも けふも けふも けふも 今又  
 昔くも けふも けふも けふも 且高  
 夏か けふも けふも けふも 夜白  
 昔の けふも けふも けふも 岳風  
 けふも けふも けふも けふも 昇高  
 うき枝のきくも けふも けふも 蟻兄  
 家と けふも けふも けふも 一七 寧一館  
 けふも けふも けふも けふも 水哉

此ころのまゝのきくまのよ イセ出田 省吾

そのひびきをきくまのよ 大ッ 子良

秋の空をきくまのよ 京 拾己

松葉の木の實をきくまのよ 京 杜若

松の空をきくまのよ 京 坂尾

桐一葉をきくまのよ イセ 雲路

かしはきくまのよ 白子 標六

赤不流をきくまのよ 二六 乙翁

赤不流をきくまのよ イカ 木客

古のやけ自然をきくまのよ イカ 梅俣

くまのよ 江呂 禾明

松の實をきくまのよ 京 水良

田代をきくまのよ 久居 兼丈

こころをきくまのよ 京 魯風

こころをきくまのよ 木槿塚 如風

床の空をきくまのよ 京 太一

正月の空をきくまのよ イセ久居 安曇

名月の空をきくまのよ イセ久居 花山

きくまのよ 京 鯉旭

小鳥のよ 京 中吉

葉の香や油んいせとらとさき一七 猶年

春風や屏風いせ木槿ツカさきむらさき 巴城

志松いせのりやる一七のたきやあ 一山

冬いせのうやふ一七のうしやとる一七家 度柳

枯いせより尾花いせ名なきいせ深きいせ水 太龍

ハ翔いせやあいせあいせたいせあいせあいせ白いせ鶴 一之

志いせらいせ箒いせといせきいせはいせくいせ物いせ活いせのいせ白いせ玉いせ 波月

ほいせゆいせそいせくいせ操いせといせさいせくいせあいせ虫いせのいせあいせ 紫葉

るいせのいせあいせのいせあいせきいせのいせさいせけいせくいせ鳴いせ子いせのいせあいせ 謝年

葦いせ入いせやいせそれいせあいせくいせあいせさいせるいせあいせくいせさいせ 葦中

上土

舞いせ風の吹いせひいせけいせるいせやいせ琴いせのいせあいせきいせ 山七口 一啓

といせるいせあいせやいせ融いせといせかいせふいせ袖いせのいせ不いせ祿いせ 和良知 光石

きいせそいせくいせ寸いせ啼いせていせ徒いせ一いせきいせ塚いせのいせ本いせ いせ久居 一丘

ふいせといせふいせはいせくいせといせないせくいせていせまいせのいせまいせ 山七口 村山

仕いせあいせくいせ終いせ一いせ仕いせ業いせのいせ中いせへいせまいせのいせ月いせ 柵子

其いせのいせ敷いせといせ入いせこいせういせ啼いせといせあいせ涙いせりいせ いせ 总弓

山いせひいせといせ山いせ幸いせしいせろいせといせへいせていせ名いせ新いせ月いせ 山七口和東 宗武

るいせをいせ筑いせといせ河いせ霧いせのいせまいせ川いせ雪いせりいせ いせ 枕滝

といせ久いせれいせいいせあいせのいせ千いせ磨いせ一いせ月いせのいせ珠いせ いせ 孝石

おいせといせういせもいせいいせりいせといせ毫いせ何いせのいせ角いせ刀いせ取いせ いせ 可松

まがくち方よこてあまの雲の雲 京 橋治  
底吟もあまよこて月えうね 江呂 箕玉  
山はまこ飛くは物もみちうま 和良 鯉桃  
伊豆くちまのくちまのくちま 大坂 貞家  
叶くの中よあまのくちま 京 花庵  
遙ね乃ま先ぬくぬく 標童  
陸のまも丸く雪りや散く 作良 芙山  
幾悔もあまのくちま イセ 雙龍  
今もあまのくちま 上 柳珉  
はくちまのくちま 大 猪吹

花あまのくちま 菊芝  
人のあまのくちま 大坂 東塔  
焚菴はあまのくちま 春風  
叶のくちま 柳室  
草くく 知童  
まのくちま 紫造  
一ふに田やうあまのくちま 豊雪  
あまのくちま 九氣  
あまのくちま 加賀 下遊  
あまのくちま 雨伏

家海に叶を今式のむしるる如 京 万葉  
 かくくかくくく風情や枯居る 平 枝  
 満月の中を今も何る新 ハニ 花居  
 敬心のあはく増やりの月 イカ 二交  
 竹をまてしきかんの白うな 京 如流  
 古口の遠忌を月 京 斜月  
 灯をむき夜を危叶乃 十三 其山  
 猿もあてしめ流るん秋 京 仙家  
 孟蘭盆はかきし月如 京 如柳  
 新葉のむしるの白くは 京 南徳

上三

年くくくくく塚のさう如 京 山風  
 月けあ叶の限る 京 凡光  
 声くくくくく白のあち 京 化蜀  
 何見てもあち 京 芋丈  
 塚のおし 京 南枝  
 ちを 京 鳥乙  
 存外 京 邪言  
 いき 京 若阜  
 文 京 里栢  
 面 京 雲突

傳くはあきまき茶中法の味南都 金葩  
 至るも何れ尋人もなすの月作州 茶尺  
 鏡にまも丸きす日中散一葉 茨山  
 かきりあきまき又月あま大け合イセ 淇悠  
 ちりけり又暖くまき若乃系ナガリ 折枝  
 志はしうる雨より家のそき色江州 玉脂  
 あまき雪のむくしを丁の味物イガ 玉亭  
 本末ハおふし流るや秋の水大坂 草乙  
 翁馬中思ハハ神も家のたかく 麦風  
 諸ももり神もあまらるるの日 工青

なるにたれこらなわたり月の人ナニハ 貞野  
 任もそし菴もろし虫のきイカ 水龍  
 通ぬ半乃刺き信ししれ新ナニハ 月夜  
 表むしのきハゆへにあまらるる路月イカ  
 ね首も神もあまらるる志しれ椽イセモツ 梅門  
 新趣と新と茶もけりまゆイセ 白雪  
 若の伸しして羽もろく鴨やまらるナニハ 標園  
 若のあまらるさや 而も十年 宜涼  
 子向もなれしけのこなしあ白戸 杏翁  
 常盤木のあまらるるを指りし如白戸 双鳥

名月やかさ形りこころやまの歌 イセ 子遷

新 雲れこころ成るるや筆の雲 士明

海のおと音ハ草花の音芭蕉塚 桃友 イセ

雲の影の子向や塚北朝のけ 松山 イセ

ゆれたまてほふくけを成りや 静抄 イカ

後しれを身ハ舞るるゆきとと 十三八 好月

春の依り咲りや畦の かげのま イセ 香油

香の火もちねこ交るるけとや 奥口 イカ

道さきく子向るはやまの花 竜庭 イセ

まじりしきささ成のおのえの如 カハ子 巴山

古はり道のつらさるる旅さるる 三架 イセ

沁届をすくやふきれ破時 イセ 韜甫

道端の塚子も向むる本檜 甫山 イセ

よりまじり多味 鈴虫や塚の 新 イセ 波月

虫啼や 濕り此房の 草 大坂 虎尺

あけりりる 新程 遠く 盆 イセ 昌風

おのりりり 香け 薫るや 盆 竹生 送唐

積る程 光り 塔り 雪 イセ 乃 山 柳波

稚児十月より 文る 春 乃 江及 兼陽

走るるを 登り 池 乃 怪 乃 イセ 田春



秋の夕中 雲のくさくさ 夕の風  
 大坂 梅  
 菊の香も 夕の影も 垣好  
 伊カ 朗  
 時雨の音も 又も 夕の影も 序の音  
 江ノ 謙  
 昼啼く 垣や 夕の音も 早の音  
 士好  
 秋風の音も 夕の影も 夕の音  
 一石  
 おもひ 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 寿旭  
 濱乃 秋の音も 夕の影も 夕の音  
 志只 幸池  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 一石  
 屍の音も 夕の影も 夕の音  
 山甫  
 朝露の音も 夕の影も 夕の音  
 佳美

夕の音も 夕の影も 夕の音  
 大坂 風阿  
 山雨の音も 夕の影も 夕の音  
 大坂 機是  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 十二六 負樹  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 和カ 時雨の音  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 和カ 芳吾  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 伊カ 折人  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 伊カ 富暁  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 伊カ 閑雅  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 伊カ 昇山  
 夕の音も 夕の影も 夕の音  
 伊カ 夕風

ひさのよね吸えふくねの秋 イセ 如流

なふ来す海こいのさくら ヒ浦社 杜節

蓮ののを利もあても イカ 寄客

ささ哉字本 イカ 松甫

種を苗 ナニハ 虚舟

月のひ イカ 野橋

志うれ イカ 其石

か 和良 松隣

花の イカ 花水

萩の色 イカ 梅井

芭蕉翁七十遠忌追福

能詩之連歌

名張連

若きれ古 松 松

井 春 春油

えん 深 深

く 如 如毛

美 共 共

一 猪 猪吹

於 斜 斜月

長 如 如

日よほしき心よほしき心よほしき

女 玉英

夢よほしき心よほしき心よほしき

起就

涼風よかたまりきりし月の光

市雪

て思ひきりし戸柳の光

鈴江

清酒よけ家解きし中使

梅鳥

志よほしき心よほしき心よほしき

女 玉扇

春風の深に腋のたよりあり

女 花遊

あつめの心よほしき心よほしき

女 菊露

あつめと心よほしき心よほしき

松花

燈心の光よほしき心よほしき

蝟石

田

習強よほしき心よほしき心よほしき

如水

ぬれも改りし門の神一侍

女 梅史

狂つきよほしき心よほしき心よほしき

風簪

こそきよほしき心よほしき心よほしき

女 紅英

柳をよほしき心よほしき心よほしき

倉芥

くさくさぬれよほしき心よほしき心よほしき

浦春

文口よほしき心よほしき心よほしき

袖

待急際よほしき心よほしき心よほしき

山

らやほしき心よほしき心よほしき

乞

あつめの心よほしき心よほしき心よほしき

春

又ふゝおりのさ〜はみ〜  
 さ〜のさ〜のさ〜のさ〜  
 管絃とよよ〜のれ〜のさ〜  
 漣利とよよ〜のれ〜のさ〜  
 鶯ハふさ月りよさ館 柳工  
 おな〜かま〜のさ〜のさ〜  
 花は〜のさ〜のさ〜  
 こ〜のさ〜のさ〜  
 石

そ尾

芭蕉翁乃已十遠急追福

和名丹波市連

桃語之連歌

もけさの唇さき〜餘の風

翁

方明か〜む存縁の露 吳陵

さら〜と木の葉うち散る中〜 三笠

迎そろそぬ〜の米吟ふ 悟伯

少年

何は〜と〜な〜お〜な〜ふ世の晴 柳美

烟乃笈の志おる〜き 五陵

新国〜流りゆ〜の激 奇翠

声〜ま〜と〜の〜近はき 冬強

井女哉 韦任 叔母 祢 多轍

高のふり 斗まき さらぬ 湯屋 柳水

此注 逢まき 楠 板 陰馬 及之り 春兄

けんそ なる 是 哉 なら 寸 奥 幽 峨 布山

荒もく 止むる 月乃 暮 淋 春岱

まふ づゝ る 可 麻の 身 ぶ ぬ 梅雪

梅 淡の ち 暮 丁 さら 暇 あり 雪吟

巻 しの 務 女の ころ ぬ 勢 棒 蕙山

か 持の きた 和 系 それ と 大 なる 露香

さ い かな ち 年 終 ぬ 桂子 執筆

蕉 露る 七十年 忌の 法 管 学 つま なる せ じ  
哉 思ふ 小 法 いて ち 借 されし 一 年の ち なる  
を 感し ぶ ち 守 け ち 愚 吟 を 傳 人 と ち

表六章

教 とも 誠 なる ち 渡 せぬ 一 葉 竹 溪

了 稿 七 晚 稿 七 お ち や ち 秋

軒 ち ら き 月 小 新 酒 の 口 け け

仕 つ ち ち せ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

いもころりか素ぬ花のつくろひ

追尋俳諧連歌

檜州系海太運社

祖家

このひの多残やまきよ子の庵

能くれ男あまぬき山路 紫金

かき初の油灯を月や昇るらん 返出

車の水残始と節り寒 一東

あせいの蕨を巻え撰入る 光樹

午時能く雀の森わびと比 曲阜

五七五

表八章

安法津社中

まけこのハ子供らあきさ露の妻 夫州

あひかきんあぬるむ井の水 如栗

おし合残ぬける月白の幣りく 栗

あし西え成し風のやりらき 州

あむろ川考をうりてく毛 栗

あささいこと望いあし 栗

月影と鈴のようなる驛める 栗

あさ色の湯のほろふやそ 州

芭蕉翁る七十遠志追福

俳諧之連歌表六章

白及小川

行之地と海や志くれ終未申

長高切

況危と啼け人も来ぬ川

希らくと松の森るる己やおりと

なりと立釜可水をさうり

の、新言ひくく入ぬ月の意

のさういゝる夢の半く一窓の上より

芭蕉翁追善俳諧之連歌

江州野川連

喜水

移るる人携へ川並末之申

控しうちいゝ秋のけさ風

野道

あふの懐哉月り指さして

苔枝

出来て間乃つる白水能絶

水

さしあふ巾をそけくつ笑なかり

道

坂へ還るる友大の舌

枝

芭蕉翁追福俳諧連歌

一折

河津社中

みのしりたき紙やま来よるの尾子

月可とぎ紙のうけとあすあ ち石

行乾く妹の木帯の鼓のうく 景圃

橋多て号と子履りく 桂外

舟よさるるういやさるう穂もうは 玉圭

不ろくかるる魚紙とみくる 手曲

暖芦内二序もさるる喜比次講 鼓松

ふ以巨魁もくる、永すく 梅暖

誅を招れと志きりもせりく籠のう 不心

大和わりりのまきるむむ懸 圃

上三

人のあと碎ハきハぶの出来る歌 石

醫者のゆりハのいハるる 圭

昇るをとちんはあなりく文る月 外

鯨也ハ泥群る小いくく 松

ままらり市人の門系成飲あるる 岫

今秋成所も小冬もおて氣 山

枝ちりく花の木はきね能あく 暖

まま吹きハ木様草をぬく 照映

子向能詩まちち一折 洞律梅拂社中



幾千里をこしおとひや秋のや

り候二層の雲ふ阿婆子 巴丈

月うしく木換の小家をかわ文く 梅暎

杖も草履ものきく 初菜

昔話とき懐くの歌の語りしく 春愁

貰うく袋の衣あ度きく 霜曉

お寄さくも遊びし料理舎 如流

何そのときいせまの春祈 芳華

兄弟のうきふにをりてさうさ 文

顔ふてから急戦止るきく 暎

み汲下まきかりる 峰菜や 菜

年（櫛の生く時きく 愁

とくるもよみなくおき月の照 曉

赤錢拂ふて戦く 稻風 流

田舎のけ略してきく 華

大八をうきく 上る 菜

志とや、日初かき花け、あ 暎

考、れ輪ぬけく 几巾より 愁

芭蕉落るるに遠志

俳諧連歌

伊賀上野連

其容

吸ふつゝもてたせりよの花木槿

一層の居たりぬハ電魚鳴く 梅室

盃の光り志をうくいきよふさ 其章

結句をきらぬ竹の割下結 其石

し羊の隣ハ遠き車井戸 桃溪

奥へ動ふさふ里 柳 容

高勢ハ番頭よりよまうせおき 其石

茶きらぬな娘りちちち 章

うれ来て夕ふ不垣ハ押込き 容

きりきりときぬ ころの泣 溪

けんとのユ合れ ころき書物箱 章

鞠蹴さるるり出入浪人 其石

戸啼てこきとちときぬる月 溪

たらいの水を夫す寸秋風 容

良きよ、まるとりぬハほいこ 其石

ちこくもくけ振上る芥 章

こころなく花ハ急なる牛の鞍 容

何ふやら嬉し其の曙 溪

未畧

芭蕉翁る五十遠忌追福

能諧連歌 浪花月姥舎無行

可る糸とやや吊ふ月よふ不れ推 貞哉

らまゝぬ神とせ巖まじり月 貞野

大沼残たうりと厚めうら群と 貞蘿

善清のうては紙をちりめり 芦郷

とまゝの子よのひんげの椽の先 巳童

ひらききらてハ撓す考系 貞菊

持ふ風の皿へたまうー 貞室

たくほくまつく福系のも 哉



おのころ迂洞の云ぬあたるをこ 野

と月残白り 双六をうけ 貞翁

月おる森もこれ積もたふを 郷

そと梅のふけは浅く祐り堀 蘿

これ好な没虫塚もそをせよえ 貞蒲

化病もそもかー 陀羅寺 野

甲子と庚申侍の盛之ー 郷

ふ斗りちうる 意の諧構 童

咲こより苔の多いつとれ花 峯

送煙料もむれ 味ひ 郷

公家下ハ能のつり念入 野橋

踏むけ毛つらの野をたふら 蒲

糸飾れ月利り満そや起る 哉

糧の垢きと〜月の汗 郷

入能のきり折〜と瘦を回ひ 巴山

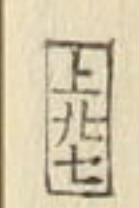
禿の惣作揚り口お粉 空

峯も〜はまき〜はまき〜隙子我 貞砥

者米粒のり〜す南風亮 野

画圖て〜こ〜ま〜ま〜ハも〜小松系 薙

珠多〜年〜鳩のな〜ぬ古を 巴山



名々の明々の群〜何をれなあり 蒲

貸至残さ〜ま〜本至町の秋 橋

志人の連枝いや〜る お横江 童

言掃盃ま〜り〜く〜ま〜む垣幸 山

やう〜と海海ハ細り成〜り 御

多〜あ〜れ〜ま〜ま〜き〜き〜め〜元 菊

と〜く〜く〜面新志〜く〜入花は〜り 砥

出り雨乃唐き〜さ〜の理 執筆

そ〜尾



竹苑の戸を明く富きる二つが 路青

真の眼にたゞしくさくさく 巴律

余の風のまじらぬ暮の日暮の角 奇流

あめ果に結まゝをわね尾尾 未登

常も板とくぬる 四つこ那 瓢竹庵 苔政

春をわね矢くもくもく 春痴

あふあふくぬるまぢんぬもさく 右文

あふくぬるまぢんぬもさく 又考

あふくぬるまぢんぬもさく 松朱

あふくぬるまぢんぬもさく 可度

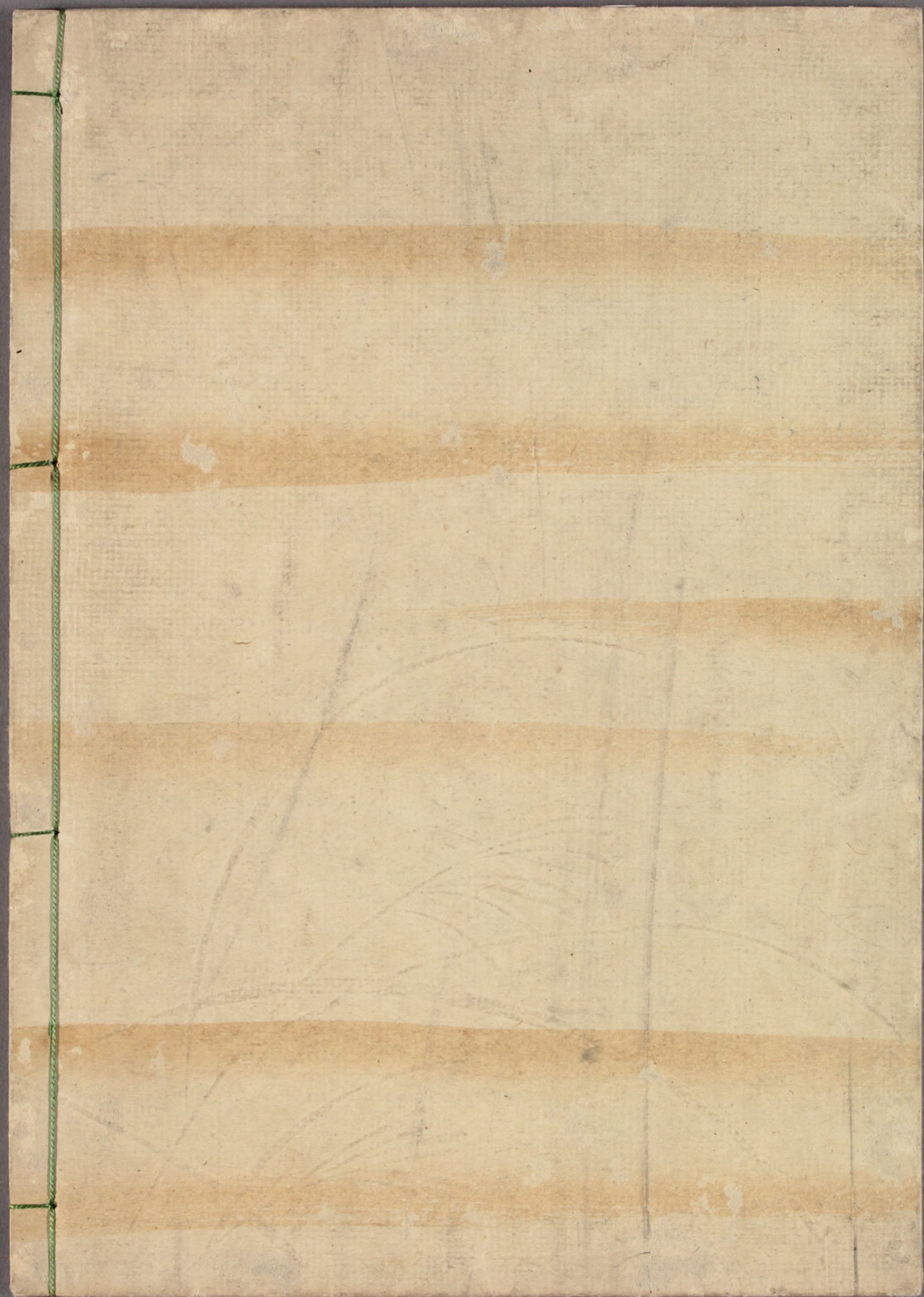
四毛番の夜舟もせく 鳴ふとり 香園

花とりてはく 津ふ月おの横ふ 葵苑

うらねえあせ月のあかりとらる 蛙方

古  
卿  
連  
發  
之







祖多百五十年と物とよまらば

花中大の神や御開眼

志く城の宮とて奉り

